

『通俗三國志』より「漢帝を廢して曹丕位を奪ふ」

文字起こし／佐藤ひろお <http://www.3guozhi.com/>

曹丕は魏王の位に登りて、建安二十五年を延康元年と改め、夏六月に文武の百官を伴ひ、精兵三十萬騎を引きて沛の譙県を巡り、先祖の墓を祭りて榮華を故郷に耀かしければ、郷の老人道の岐に出て酒を献り、漢の高祖沛に還り玉ひし例に効ふ。

是年の七月に大將軍夏侯惇病ひすでに危ふしと告げれば、曹丕速やかに鄴郡に回りけるが、数日以前すでに死したり。曹丕自ら孝を掛けて東門の外に殯し、礼を厚くして之を葬る。

時に八月の間石邑県に鳳凰來儀し、臨菑城に麒麟出で、鄴郡に黃龍現すと報じければ、曹丕が手下の百官ごとごとく相ひ議して曰く、

「いま上天象を垂れ、これ魏王漢に代わりて天を治め玉ふべき瑞祥なり。いそぎ受禪の礼を調へ、漢帝を勸めて天下を魏王に禪らしむべし」

時に侍中の劉廙、辛毘、劉曄、尚書令の桓階、陳矯、陳羣等を初めとして、宗徒の文武四十余人みな來たりて、太尉の賈詡、相国の華歆、御史大夫の王朗に見えて右の趣きを告げれば、賈詡笑いて曰く、「諸人の意見よくも吾が機に合へり」

とて、華歆、王朗と共に中郎將の李伏、太史丞の許芝等を伴ひ、内殿に入りて漢の天子に見え、華歆奏して申しけるは、

「臣伏して魏王の曹丕を觀るに、位に登りてより恩徳を四方に布き、仁慈よく万物に及びて、古に越え今に騰がる。唐虞と云へども争でか之に過ぎん。郡臣みな漢の運已に蓋きたるを見て共に相ひ議し、陛下の堯舜に効ひて山川・社稷を以て魏王に禪り、上は天の命従ひ、下は民の意に合ひ玉はんことを望む。然る時は陛下自ら安閑にして少しも憂ひ候はじ、是れ祖宗の幸甚、万民の大慶ならん」

と申しければ、帝これを聞し食して暫くはものを宣はず。良やありて百官を覗う覲ひ、哀しみ哭きて宣ひけるは、

「朕よく高祖三尺の劍を提げて、秦を平らげ楚を滅ぼして、新たに天下を創立し玉ひ、世統相ひ続きて四百余年伝はりたるを想ふに、朕真に不才なれども、又大なる悪逆をも成さず、安んぞ祖宗の大業を等閑に弃つるに忍びん。汝もろもろの臣再びよく公計を議せよ」

華歆乃ち李伏、許芝を引きて御前ちかく進み、

「陛下もし信なりとし玉はざれば、此の二人に能く問ひ玉へ」と奏す。

時に李伏申しけるは、

「魏王位に即きてより、麒麟出で、鳳凰來り、黃龍現じ、嘉禾・瑞草・甘露の奇祥ことごとく數へ難し。是れ天象を垂れて魏まさに漢の禪りを受くべきを示すものなり」

許芝奏して曰く、

「臣等司天の職を掌り、夜天文を考へ視るに、炎漢の氣數すでに尽きて、陛下の帝星光を隠して明ら

かならず、魏王の乾象 天を極め地を際る。言を以て伸べがたし、殊に其の讖文に、『鬼』辺に在りて『委』相ひ連なる、当に漢に代はるべし。『言』東に在りて『午』西に在り、而『日』並び光して上下に移ると云へり。此れを以て論ずる時は、陛下 早く位を禪り玉へ。『鬼』辺に在りて『委』相ひ連なるは乃ち『魏』の字なり。『言』東に在りて『午』西に在りとは乃ち『許』の字なり。而『日』並び光すは乃ち『昌』の字なり。此れは魏 許昌に在りて漢の禪りを受くべきの象なり。願はくは陛下、よく察し玉へ」帝 宣ひけるは、

「祥瑞・讖文 みな是れ謬はりの虚説なり。安んぞ軽々しく万世不朽の基を捨つべけん」華歆 又た曰く、

「陛下 大いに差れり。昔し三皇・五帝 徳を以て相ひ譲り、徳なきは徳あるに譲る。此れに依りて三皇より以来、みな子孫に伝へて徳を論ぜざれば、桀・紂に至りて天下これを誅す。天下は一人の天下に有らず。乃ち天下の人の天下なり。陛下 早く退きて徳ある人に譲り玉へ。遅き時は変を生ぜん」

王朗 又た奏して曰く、

「古より以来、興ることあれば必ず亡ぶことあり。盛んなること有れば必ず衰ふことあり。豈に亡びざるの国、敗れざるの家あらんや。漢朝 相ひ伝へて四百余年、いま氣運すでに尽きたり。自ら迷ひを執りて禍ひを招き玉ふな」

帝 痛く哭いて後殿に逃げ入り玉ひければ、百官みな大いに笑ひて退き、次の日 又たことごとく朝に集まり、内官に命じて帝を請じ出さしむるに、帝 怖れて出で玉はざりければ、曹皇后 問ひて曰く、

「いま百官みな陛下を朝に請て、政を問はんとす。何ゆゑに出で玉はざる」

帝 御涙を流して宣ひけるは、

「汝が兄 わが位を奪はん為に、百官をして逼らしむ。朕この故に朝に出ず」

曹皇后 怒りて申しけるは、

「汝 わが兄の国を奪ふ逆賊なりとす。汝 漢の高祖と云ひしも、裳と本これ豊沛の一匹夫、なほ強きを頼みて秦の天下を奪ひ取れり。吾が父は四界を掃ひ平らげて、吾が兄しきりに大功あり。何ぞ帝位に即かざるべき。汝位に登りて已に三十余年、もし吾が父を得ずんば、早く微塵にせらるべし」

と罵り、車に乗りて出んとす。帝いよいよ驚き急ぎ御衣を更めて前殿に出で玉ひければ、華歆 奏して曰く、

「陛下 早く臣が諫めに依りて、禍ひに遭ふことを免れ玉へ」

帝 哭いて宣ひけるは、

「汝等は皆な漢の祿を食らふこと年久し。殊に功臣の子孫多き中に、何とて朕が憂ひを分くる者ひとりも無きぞ」

華歆が曰く、

「陛下もし天下を魏王に禪り玉はずんば、且夕 大いなる禍ひあらん。臣等 敢へて陛下に忠なきに有らず」

帝 宣ひけるは、

「誰か朕に禍いする者あらん」

華歆が曰く、

「天下の人ことごとく陛下 人君の福なく、四海の大乱に及ぶことを知る。魏王もし朝に在らずんば、陛下を弑すもの公庭に満ち塞がらん。陛下なほ恩を以て徳に報ずることを知り玉はずば、天下の人ことごとく陛下を伐たん」

帝の宣はく、

「昔し桀・紂 無道にして生民を残暴せしかば、天下の人ことごとく之を誅せり。朕は位に即いてより三十余年、兢兢業々として嘗て非礼の事を行はず。天下の人たれか朕を伐つに忍びん」

華歆 大いに怒り声を荒げて曰く、

「陛下 徳なく福なくして自ら帝位に居玉ふは、桀・紂が残暴より甚だ過ぎたり」

帝 恐れ驚き、袖を払いて起ち玉ひければ、王朗 屹と華歆に目加せするに、華歆 走り寄りて御衣の袖を扯き止め、色を変じて申しけるは、

「陛下の御意 許すと許さざると、早く一言を以て決し玉へ」

帝 怖れ戦なきて答へ玉ふこと能はざる所に、忽ち曹洪・曹休の二人 剣を帯て殿に入り、

「符宝郎は何づくに在る」

と問ひければ、符宝郎の祖弼 罵りて申しけるは、

「玉璽は乃ち天子の宝なり。安んぞ汝等に与えん」

曹洪 大いに起こり、武士に命じて祖弼を外に引き出し、首を斬りて棄てたりければ、帝 大いに怖れ玉ひ、階下に武き魏の勢 甲を被て戈を持ち、数百人あつまりたるを見玉ひて御涙 血を洒ぎ、

「祖宗の天下 何ぞ期せん。一旦に廢せんとは、朕 九泉の下に死して、何の面目ありて先帝に見ゆべき」とて哭き玉ひ、乃ち郡臣に向けて宣ひけるは、

「朕 願はくは天下を以て魏王に禪り、心安く一期を暮さば幸ならん」

賈詡が曰く、

「臣等 いづくんぞ敢へて陛下に負かん。陛下いそぎ詔を降して万人の心を安くし玉へ」

帝 御涙さらに止らず、乃ち桓階・陳羣に命じて禪国の詔を作らしめ、華歆を使ひとし、玉璽を捧げて百官と共に魏王宮に行きて曹丕に譲り与へさせらる。

曹丕 大いに喜び、聞きて之を読むに、其の詔に曰く、

「朕 位に在ること三十二年。天下の蕩覆に遭ふて、幸ひにより祖宗の靈に頼り、危くして復た存す。然れども今 天象を仰瞻み、俯して民の心を察するに、炎精の數 既に終りて、行運 曹氏に在り。是を以て前王 既に神武の蹟を樹て、今王 久しく明德を光耀して、以て其の期に應ず。曆數は昭明にして、信に知る可し。夫れ大道の行はるるや、天下 公を為し、賢を選び能に与す。故に唐堯は厥の子に私せず、

(一)『三国志』卷二文帝紀 注引 袁宏『後漢紀』を抄録したもの。『後漢紀』では十月乙卯(十三日)の日付をもつが、『三国志集解』で盧弼は、乙卯の禪詔としては『獻帝伝』に別のものが載録されていると指摘する。

而して名無窮に播す。朕義なりとして焉を慕ふ。今其れ踵を堯典に追ひ、位を禪りて丞相・魏王に与ふ。王辞することを得ること無かれ」

曹丕 見了はりて即ち禪りを受けんとしければ、司馬懿 諫めて曰く、「主上、かるがるしくし玉ふな。已に詔ありて玉璽を禪り玉ふと云へども、表を上りて再三献辞して天下の人の誹りを免れ玉へ」

曹丕 これに従ひ、王朗に表と作らせ、玉璽を返し 献りければ、帝その表を聞き玉ふに、表に曰く、「臣丕 謹んで詔を受け奉る。伏して惟るに、陛下 垂世の詔を以て、無功の臣に禪りたまふ。臣をして聞き知めて肝胆 摧け裂け、措く所を知らざらしむ。切に以んみるに、堯 大位を賢に譲りて、巢由 跡を避け、後世 之を称す。臣 才は鮮なく徳は薄し。安んぞ敢へて命を奉ぜん。請ふ、盛世に於いて別に大賢を求め、礼を以て之を識りて、庶はくは萬年の議論を免れたまへ。臣丕 謹んで璽綬を納めて還し、死を闕下に待つ。惶懼・戦慄の至に勝へず、表を奉りて以て聞す」

帝 表を覧ありて御心疑ひ、郡臣を顧みて、「魏王 禪りを受けず。いかがすべき」と問ひ玉へば、華歆 奏して曰く、

「陛下、いま唐堯の聖に効はんと欲し玉ふか」

帝 宣ひけるは、「如何なる故ぞ」

華歆 が曰く、

「昔し唐堯 二人の御女あり。娥皇・女英と云へり。位を舜に禪り玉へども、舜さらに受け玉はざれば、了に二人の御女を妻わせて後に帝位を禪り玉へり。此れに因りて今の世までも大聖人の徳と称す。陛下 幸いに二人の御女あり。何ぞ唐堯に効ひて魏王に妻せ玉はざらむ」

帝 これに依りて已むことを得ず、復た桓階に詔を造らせ、高廟使 張音を勅使として二人の御女を車にのせ、玉璽を捧げて魏王宮に到らしめ玉ふ。

曹丕 詔を披き見るに、其の文に曰く、

「惟れ延康元年十月己酉（七日）、皇帝詔して曰く、咨爾 魏王、上書・謙讓、朕 切に為ふに、漢道陵

(一) この詔内の傍線部は、李卓吾本に準拠し、毛宗崗本と異なる。

(二) この上表は李卓吾本が『献帝伝』を独自の再編集したもの。毛宗崗本は省略。

(三) 次文で行御史大夫とある。後漢に高廟使という官職があったか要確認

(四) 『献帝伝』乙卯（十三日）の第一次禪詔の抜粋だが、『献帝伝』と日付が異なる。『通俗三国志』にある己酉の日付は、李卓吾本に基づく（毛宗崗本には日付の記載なし）。『三国演義』李卓吾本における一回目の禪詔は、裴注『後漢紀』の乙卯の詔に基づく。『三国演義』における二回目の禪詔は、裴注『献帝紀』の乙卯の詔に基づく。『三国演義』の編者が、裴注の掲載順に沿って参照したと思われる。

遅し、日已に久しきことと為る。幸ひに武王たる操の徳符運に膺り、神武を奮揚し、兇暴を芟夷して、区夏を清定す。今王たる不ば前緒を継ぎ承け、至徳は光昭なり。声教は四海に被び、仁風は鬼区を扇ぐ。天の歴数実（二）に爾の躬（三）に在り。昔し虞舜大功二十有りて、而して放勳禪（四）るに天下を以てす。大禹疏導の績有りて、而して重華禪るに帝位を以てす。漢堯の運を承け、伝聖の義有り。加々（五）靈祇（六）に順（七）ひて、天の明命を紹ぐ。二女を釐めて降し、以て魏に嬪（八）せしむ。行御史大夫の張音をして、節を持して皇帝の璽綬を奉ぜしむ。永く人君と為す。万国天威を敬仰し、允に其の中を執れ。天祿永く終へん。之を敬しめ

曹丕 見了りて大いに喜び、密かに賈詡に問ひて申しけるは、

「いま二度詔を受くと云えども、孤ただ位を奪へりと人の沙汰せんことを恐るるなり」

賈詡が曰く、

「これ甚はだ易きことなり。再び玉璽を返して堅く辞し申し、密かに華歆に命じて一つの台（一）を作らしめ、受禪台と名付けて吉日を択び定め、大小の百官、四夷・八方の人を集め、天子に自ら玉璽を捧げて天下を主上に禪らしめば、智者の謗りを塞ぎつべし」

曹丕 「しかるべし」と喜び、又た表を上りて玉璽を回す。

張音 内裏に入りて魏王受けずと奏しければ、帝郡臣に問ひて宣ひけるは、

「魏王受けず。いかがせん」

華歆が曰く、

「陛下一つ台（二）を築き、受禪台と名づけて公卿・庶民を集め、明白に位を譲り玉へ。然る時は陛下の子々孫々 長く魏の恩を被り玉ふべし」

帝これに従い、太常院官に命じて地を繁陽にトせしめ、三重の高き台を築き、十月庚午の日寅（三）の刻（四）を択んで、帝乃ち曹丕を台の上の請じ、自ら玉璽を授けて位を禪り玉へば、大小の官人四百余員、御林虎賁の軍勢三十余万、及び匈奴单于・化外の人ことごとく台下に集まる。

(一) 『献帝伝』にないが、王の諱を李卓吾本が追記

(二) 『献帝伝』にないが、王の諱を李卓吾本が追記

(三) 『献帝伝』は、「仰」を「御」につくる。李卓吾本は「仰」につくる。毛宗崗本では、文自体が省略される。

(四) 『三国志』文帝紀、『献帝伝』、『後漢紀』に時刻の記載はない。出典を要確認。後代の儀礼を行う時刻を、遡及的に反映したか。

(五) 正史では、献帝、張音、華歆、曹丕、という経路で玉璽が授与される。『三国演義』にて華歆は、禪代の計画者、献帝の脅迫者として活躍の場を与えられるが、玉璽の授与からは閉めだされた。

帝位を禪りて冊文を読み玉へば、万人跪いて之を聞く。その文に曰く、

「咨爾魏王よ。昔者帝堯虞舜に位を禪り、舜も亦た以て禹を命める。天命常に於いてせず、惟だ有徳に帰す。漢道陵遅して、世々其の序を失ふ。朕が躬に降り及び、大乱茲昏、羣凶肆ままに逆らひ、宇内顛覆す。武王の神武に頼りて、茲の難を四方に拯ひ、惟区夏を清め、以て我が宗廟を保綏す。豈に予一人又むるを獲んや、九服をして実に其の賜を受けしむ。今王欽みて前緒を承け、乃が徳を光す。文武の大業を恢め。爾度れ、虞舜に克く協ひ、用て我が唐典に率ひ、敬みて爾が位を遜れ」と。於戲、天の歴數爾の躬に在り。允に其の中を執り、天の祿永く終らん。君其れ祗みて大礼を順ひ、萬國を饗け、以て肅んでに天の命を承けよ」と。

曹丕八般の大礼を受けて、了に帝の位に登りければ、賈詡大小の百官を引きて、尽く台下に朝せしめ、延康元年を改めて黃初元年と号し、国を大魏と号す。曹丕自ら官人に命じて天下に大赦を行はしめ、父曹操を太祖武徳皇帝と諡しければ、華歆が曰く、

「天に二つの日なく民に二人の王なし、已に帝位に即き玉ひぬれば、早く劉氏を何れの処へも移し玉へ」とて、獻帝を引き下ろし奉り、台の下に跪かしめれば、賈詡が曰く、  
「公卿に封じて即日に行かしむべし」

曹丕乃ち獻帝を山陽公に封じければ、華歆劍を取り声を励まして曰く、  
「一帝を立てて一帝を廢するは、古の常例。今上の仁慈汝を殺すに忍び玉はず、封じて山陽公とす。今日早く山陽にゆく、詔して召さずんば、必ず都に入ること勿れ」

獻帝御涙せきあへ玉はず、拝謝して馬に打ちのり、すぐすこととして去り玉へば、之を見る人哭かずと云ふものなし。

曹丕郡臣を顧みて、

「舜禹の事、朕これを知る」

と云いければ、郡臣みな万歳を三声呼ぶ。

曹丕乃ち天地を拝せんとする所に、忽然として一陣の風ふき起こり、砂を飛ばし石を走らしむこと雨よりも急にして、前後俄かに暗く成り、咫尺の内をも見わけ難く、台上の燭火ことごとく滅えければ、曹丕驚きて倒れて地に根絶す。諸人たすけて宮中に入りければ、半時ばかりして生き出で、四・五日は朝に出ること能はず。病の少し癒ゆるを待ちて華歆を司徒に封じ、王朗を司空に封じ、ことごとく百官に賞を施し、鸞駕に乗りて許昌より洛陽に到り、宮殿をぞ造りける。

(一)『三国志』文帝紀の本文を抄録したもの。裴注でなく本文にあることを重視し、この禪詔が受禪を決定づけたと『三国演義』の編者が考えたのであろうか。毛宗崗本も、この禪詔のみは李卓吾本から継承して省略しない。

(二)「咫」は周の制度で八寸、「尺」は十寸。近くのこと。